

P4-164 マウス同系卵巣癌細胞株を用いた樹状細胞投与による抗腫瘍効果の検討

九州大病理病態学

近藤晴彦, 岡野慎士, 居石克夫

【目的】腹膜播種を含めた卵巣癌に対する治療法としての樹状細胞 (Dendritic cell: DC) 療法の可能性を検討するために, 同系マウス卵巣癌細胞株を用いて DC の抗腫瘍効果を検討した。【方法】1) 皮下接種モデル: C57BL/6×C3H F1 (B6C3F1) マウスの腹壁に同系の卵巣癌細胞株 OVHM を接種 (Day0) し, Day3, 10, 17 に同系の骨髓由来 DC を腫瘍内投与し, 腫瘍体積を検討した。2) 腹膜播種モデル: B6C3F1 マウスの右卵巣に径2mm の OVHM 腫瘍塊を移植 (Day0) し, Day3, 10 に同系の骨髓由来 DC を卵巣腫瘍内投与もしくは腹腔内投与し, 腫瘍体積および生存率を検討した。【成績】1) 皮下接種モデルでは, Day21 の腫瘍体積 (mm³) は未治療群: 515.77±116.34 (n=5) に対し, DC 治療群: 160±96.03 (n=5) と有意に腫瘍縮小効果を認めた (P<0.001)。2) 腹膜播種モデルでは OVHM 卵巣腫瘍内 DC 投与方法において, Day10 の右卵巣腫瘍体積 (mm³) が未治療群: 396.30±109.36 (n=5) に対し, DC 卵巣腫瘍内投与群: 109±65.49 (n=5) と有意に腫瘍縮小を認めた (P<0.001)。しかし DC の卵巣腫瘍内, 腹腔内投与いずれも癌性腹膜炎をきたし, 腹水量および生存率に有意差を認めなかった。【結論】同系 DC の腫瘍内投与で腫瘍径の縮小を認めたものの, 予後の改善には癌性腹膜炎のコントロールが不可欠であり, DC の投与方法の改良や他の治療法と組み合わせでの検討が必要と思われる。

P4-165 卵巣癌における N-アセチルグルコサミン転移酵素の発現の意義

名古屋大

高橋典子, 山本英子, 河合智子, 中川明子, 城所久美子, 吉田憲生, 井篁一彦, 吉川史隆

【目的】癌転移関連分子の多くは糖タンパク質であり, 糖転移酵素によってその糖鎖構造が変化することにより, 浸潤・転移は制御される。N-アセチルグルコサミン転移酵素 V (GnT-V) は, 癌の転移に最も関連が深い酵素の一つで, β1-6GlcNAc 鎖という特徴的な糖鎖構造をつくる。今回我々は卵巣癌における GnT-V の発現について検討した。【方法】当院にて1995年から2006年に初回手術を行った上皮性卵巣癌症例で, 患者の同意が得られかつその後の追跡調査が可能であった83例(漿液性腺癌29例, 粘液性腺癌14例, 明細胞腺癌28例, 類内膜腺癌12例)を対象とした。手術検体を用いて抗 GnT-V 抗体による免疫組織染色を行い腫瘍細胞における GnT-V の発現を染色強度および陽性率との合計0~6点でスコアリングした。0~2点を陰性群, 3~6点を陽性群とし, GnT-V 発現と各種予後因子について解析を行った。さらに粘液性卵巣腫瘍37例(良性10例, 境界悪性13例, 悪性14例)についても同様に染色, 評価を行った。【成績】免疫組織染色にて, GnT-V は細胞質に局在し, 83例中17例が GnT-V 陽性であった。GnT-V 陽性率は, 漿液性腺癌0%, 粘液性腺癌92%, 明細胞腺癌11%, 類内膜腺癌9%で, 粘液性腺癌において有意に高かった。粘液性腫瘍では良性40%, 境界悪性31%であり, 悪性(92%)にて明らかに GnT-V 陽性率が高くなっていた。【結論】卵巣癌における GnT-V は, 粘液性腺癌において組織特異的に強い発現を認めたことより, 卵巣粘液性腺癌のマーカーとなる可能性が示唆された。

P4-166 腹膜偽粘液腫に関する後方視的検討—治療の実態及び予後因子についての多施設共同研究

TGCU

小島原敬信, 中原健次, 倉智博久, 庄子忠宏, 杉山 徹, 高野忠夫, 八重樫伸生, 横山良仁, 水沼英樹, 田勢 亨, 佐藤宏和, 田中俊誠, 本山悌一

【目的】婦人科で扱った腹膜偽粘液腫の実態を明らかにし予後因子等を検討する。【方法】倫理委員会の承認を得た多施設間共同による後方視的研究。婦人科で手術した腹膜偽粘液腫例(粘液性の腹水を伴った卵巣または虫垂原発の腫瘍)を可能な限り過去に遡り集積した。検討項目は年齢, 手術情報(残存臓器, デキストロースによる腹腔内洗浄, 温熱療法の有無, 手術時間, 出血量), 組織型, 追加治療, 術後フォローアップの項目および頻度, 転帰(手術から再発および死亡までの期間)等でファイルメーカーで作成した入力フォーマットに各施設毎に入力したものを集計・検討した。生存時間解析には SAS ver 9 を使用した。【成績】9施設から23症例が登録された。追跡期間の中央値は46か月, 再発12例(52%), 死亡7例(30%)であった。約7割の症例で虫垂および大網が切除されていた。リンパ節郭清の施行は骨盤内が9例, 大動脈周囲が4例であった。12例(52%)で腫瘍が肉眼的に残存し, うち6例は2cm以上の残存であった。デキストロースによる腹腔内洗浄は11例, 温熱療法施行例はなかった。化学療法は16例で施行, うち8例は腹腔内投与を行っていた。病理組織診断上, 良性7例, 境界悪性10例, 悪性6例であった。再発・死亡の予後因子を生存曲線で検討したところ, 有意な(Log-rank 検定 p<.01) 予後因子は残存腫瘍の最大径のみであり, 腫瘍の可及的減量が予後向上に寄与することが示唆された。【結論】腫瘍の可及的減量を支持する結果が得られた。組織型は有意な予後因子とはならなかったが, 現在, 中央病理診断による再検討中である。